

ジェネラリストのための眼科診療ハンドブック 第2版

石岡みさき 著

本書は内科開業医のための眼科知識を高める必読書である。「眼科医がいない状況で非専門医がどこまで診療するのか、どの時点で紹介するか」が的確に解説されており、自信を持ってお勧めしたい。

眼症状の相談を受けると、総合病院ではなく、近くの信頼できる眼科開業医に紹介するのが常であろう。それは普段から顔見知りで、疑問点を何でも相談できる関係だからである。著者の石岡みさき先生は、内科開業医がどんな眼科疾患に困り、何を知らないかを熟知している。外来患者さんは高齢化し多疾患を併存し専門以外の知識が必要で、ポリファーマシー（多剤処方）を併せ持っている。「目が悪い」と言えばすぐに眼科紹介、「腰が痛い」と言えば整形外科紹介では、患者ニーズに応えることができない。経過観察ができればなら「様子をみましょう」と伝え、「こういう眼科疾患なので薬を出しておきますね」と答えられるようになりたい。

本書は、第1部「救急・ER—『眼の患者』をどこまで診る？ いつ紹介する？」、第2部「プライマリ・ケア—日常診療でよく出会う眼科疾患」、第3部「眼科あれこれ—知ってトクする眼の話」の3部で構成されており、広範かつ網羅的な内容である。

巻頭の「眼症状の診断フローチャート」（複視、眼痛、充血）では、眼症状の診断ノウハウをわかりやすく理解できる。

第2部「プライマリ・ケア」の眼科疾患は必読である。往診患者さんも増えており、第7章「寝たきり高齢者の眼科治療」では、継続か中止すべきかの薬剤選

択は参考になる。第10章は「眼に症状の出る全身疾患」について記載されているが、いかに多くの内科疾患が眼症状を有するかが理解できた。花粉症やドライアイ治療を行うことも多く、自信を持って点眼薬処方ができそうである。「花粉症に抗ヒスタミン点眼液は即効性があり、1月末から点眼が望ましい」「花粉症の時期はコンタクトレンズを休んでもらった方が症状は出にくくなり、どうしても使用したいのならワンデータイプが楽」「ドライアイとアレルギー性結膜炎の軽症例の鑑別が難しい」ということも知った。

第3部「眼科あれこれ」で、眼科を最初に受診する他科疾患も目新しい知識である。外来で相談を受ける眼瞼下垂のほとんどは加齢性であり、とても増加している。眼科に頭痛で受診する患者は、ほとんどが眼性疲労である。13編の「COLUMN」も読者を楽しませる、とても興味深い内容だ。巻末の付章には、基本的な点眼薬が写真付きで掲載されており、とても役立つ。本書は電子書籍も販売されており（医書.jp, URLは<https://store.isho.jp/>）、iPadなどのタブレット端末で閲覧すれば、画像は綺麗に拡大可能で、視力障害のある私にはとても助かる。

最後に、初版刊行から3年目に第2版を執筆された石岡先生の活力と努力に感謝するばかりだ。

中西内科院長（広島市）、21世紀適々斎塾塾長
中西重清

A5・頁216 2019年5月
定価：本体3,400円＋税
[ISBN978-4-260-03890-4] 医学書院刊